野ウサギの走り

中沢新一

中公文庫

中公文庫
野ウサギの走り
一九八九年二月一〇日初版
一九九五年六月三〇日4版
著者 中沢新一
発行者 嶋中行雄
本文・カバー印刷 三晃印刷
用紙 本州製紙
製本 小泉製本
発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替 〇〇一一〇―四―三四
ISBN4 12 201592 8
Printed in Japan
©1989

中公文庫

野ウサギの走り

中沢新一著

中央公論社

目次

I
野ウサギの走り 11
聖杯を探求するタンタン 23
II
歴史を逆なでする前衛 57
出エジプト 69
「唯物論」の革命へむかう泳法 86
マジック・イン・バリ 97
III
ジャングルの哲学 125
扉の快楽 156

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

IV

バリ島のジョルジュ・バタイユ 189
感情の言語学 199
逃走者のための神秘主義 208
冬祭りがはじまりだった 219
フィールドワークする人工知能 225
山岳宗教者空海 228
新人間機械論 232
ダンス・イン・ネバーランド 237
幸福な砂漠の結婚に 244
コンピューターはタオイストか 249
性器のための出エジプト記 256
離脱の漂泊船 260

きしむアジアの歌謡曲 275
声の「悟り」 281
雷と亀 288
夜の闘い 298

V

アナリティック 317
浮上するユダヤ教、その危険な魅力 320
確かな水の中に全身をひたす楽しさ 323
高速感覚領域のポエティックス 326
神秘家の確信 329
構造分析？　聖書ははるか前方に 332
博物学または文体のマシナリー 335
地図はまだ描き終えられていない 338

孤独な長距離ランナーのために　341
音楽と言語の新交配法　344
荘子の料理人　349
民俗学の舞台裏へ下降する作業　352
「地平線の階段」をのぼる　356
ルクレティウスの悦楽　365
VI
絶筆と墓標　373
最澄の冒険　400
あとがき　425
野ウサギのわかりにくさについて　427
初出一覧

野ウサギの走り

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

野ウサギの走り

エジプトの象形文字にはじまって、イソップが脚色した古いギリシャの物語やアフリカのトリックスター神話をへて、アリスの不思議な世界やバックス・バニーにいたるまで、野ウサギはいつも奇妙な場所にたっている動物だ。

野ウサギは、いつもはねているのだ。こっちにいたと思ったら、つぎの瞬間にはもう別のところにとびうつっている。そこで、そうっと近寄ってとりおさえようとすると、するりとその手をかわして、思いもかけなかった方向にとびうつり、そこであらぬ方をじっと凝視していたりするのである。野ウサギを捕獲するのはむずかしい。どんなトリックを仕掛けておいても、あっさり裏をかかれてしまうようなところがあるのだ。こういう野ウサギだから、人間の想像力のなかでも、いつも捕獲の困難な存在として、登場してくることになる。野ウサギが、論理や価値やモラルの世界を、自由にとびはねるようになるのだ。野ウサギは、人がつくりあげた価値とかモラルとかの裏をかく。こちらの世界から、たえず離脱していこうとしている。しかし、かといって野ウサギが完全にむこうの世界に、つまり無や死が支配す

るモノトーンな「ナッシング」の世界に溶け込み、姿を消してしまうこともない。むこうの世界からさえ離脱しているのだ。野ウサギは、こちらの世界とむこうの世界の両方に同時に足をかけ、たえずふたつの世界をいききしている。だから、たえずとびはねながら、捕獲の罠をすりぬけていくような野ウサギが、想像力のなかで、どこの世界に帰属することもない、あらゆる領域にとっての境界膜の場所（そこは、ここかあそこかとか場所を指定することもできないから、場所であって場所でないア・トポスだ）で、ピョンピョンはねまわるようになっても、ちっとも不思議ではないわけだ。

家ウサギのむっちりした姿とはちがって、すらりと伸びたしなやかな足で、地面をけってとびはねていく野ウサギは、どちらの世界にも帰属することのない、境界膜を生きている動物なのである。そのために野ウサギくらい自由でプレイフルな動物もいないような気さえしてくる。野ウサギが、たとえ生物としてオスの体をしていたとしても、いつもどこか女性的な感じがするのは、そのためだ。意味や価値やモラルでできたこちらの世界をささえているのは、男の性である。女の性は、その世界のなかでは、境界の領域のほうに押し出されている。それは、女の性のほうがしなやかな流動性をもち、こちら側の生の世界とむこう側にひろがっている死と無の世界との境界膜上で、ふるふると振動しつづけていられるような生き方がしやすいせいだ。野ウサギは、そういう女の性がもっているもののなかの、いちばんプレイフルな部分とつながりをもっている。そのせいで、野ウサギは表現や想像力の世界では、グレートマザーでもなければ、家庭を守る妻でもない、自由な性を楽しむ女性として登場し

てくるようになる。生殖にも、家庭にもしばられることのない性を享楽する女性としての野ウサギ、「プレイボーイ」のカバーガールは、だからどうしたって、すらりと伸びた肢体をした野ウサギじゃなければならないのだ。バニーガールの格好に、古いヘルメスの神話のエコーを聞くのも悪くはない。

バリー・フラナガンがつくりつづけているたくさんの「とびはねる野ウサギ（The Leaping Hare）」たちは、あきらかに、こういうヘルメス神話的な生きものと、深いつながりをもっている。じっさい、フラナガンの野ウサギたちは、みんなとても奇妙な格好をしている。つり鐘の上にちょっとだけお腹を接触させて空中を舞っているような野ウサギがいる。安定したピラミッドのさきっぽで、ひらりとジャンプしている野ウサギもいる。そうかと思うと、のっそりと大地に横たわった亀の背中でおどけた格好をしているやつとか、いかにも重たそうな金床の上にすらりと立ちあがって、いまにも金床をけってジャンプしようと身構えているみたいなのとかもいる。そうかと思うと、二匹でアクロバットを演じてみたり、カンガルーのまねをしてボクシングしている野ウサギまでいる。どの野ウサギも、どっしりと安定したもの、重たい感じのするもの、均質でどこにも襞とか窪みとか渦巻きとかのないものをけりたて、ジャンプして、そこから離脱しようと身構えている。つり鐘とかピラミッドとか金床みたいに、大人っぽく、重力の作用をあたかも常識のようにうけとって、その常識を体現してみせるような存在の仕方を誇っている連中のすぐそばで、おどけたダンスやアクロバットをしてみせているのだ。でも、よく見てみると、フラナガンのつくる野ウサギたちは、け

っして、つり鐘や亀やピラミッドや金床から完全に離脱して、むこうの世界にすっかりとびうつったりもしていない。野ウサギの作品群で、とりわけ張りつめた緊張感をつくりだしているのは、むしろとびはねる野ウサギとどっしりと安定したものとの接触点であるようにみえる。ジャンプの瞬間、地面のひとけり、回転しつづける独楽の軸、打ちおろされた次の瞬間にはもう金床からとびはねているハンマーの一撃、すばやく突き出されすばやくひっこむパンチ、重力の作用を軽々と手玉にとってみせるアクロバット芸人の身ごなし、その接触点、離脱のその瞬間に、はりつめたかたちをあたえることによって、フラナガンのつくる野ウサギたちは、ひとおもいに、ヘルメス神話的な生きものに近づいていくのだ。

地面や亀やつり鐘や金床をけりたて、打ちつけるようにしてはねあがる野ウサギをつくっているフラナガンが、口数少なく自分の創作について語ろうとするときに、しょっちゅう、アルフレッド・ジャリの「パタフィジック」に言及していることも、こんな風に考えてみれば、じゅうぶんに理解ができる。ジャリはパタフィジックによって、あらゆる種類の重力の作用から自由になった状態にある世界のフィジックを、言葉で記述しようという、とほうもない企てを実行しようとした。パタフィジックは、善悪をめぐるいっさいの価値判断から離脱している。価値という重力の作用が、その周囲に意味とモラルの星雲をかたちづくろうとするからだ。それは、真理を語りだそうとする言葉のはたらきからも離脱している。言葉が真理を語ろうとするとき、それはほんらい自由でたらめなことを愛している、この世界のありのままの姿を見えなくさせてしまう権力者のようなふるまいにでるからである。パタフ

「三日月と鉤金の上を跳ぶ野兎」1983. ブロンズ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com